

2023年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点研究会・活動報告

講演会①：「ブラジル移民青年隊にみる沖縄出身戦後移民の特性——南洋群島引揚者との関わりを意識して」

花木 宏直（関西学院大学）

日時：6月30日(金) 17:00～19:00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス1号館206教室

要旨：

沖縄では近代より多数の海外移民を送出し、第二次世界大戦に伴う中断を挟んで、戦後も南米を中心に移民を送出した。本発表では戦後移民の1つであるブラジル移民青年隊を取り上げる。この事業は1950～1960年代に行われ、公募移住により農業開拓を目的として計300人を送出した。そして、戦後移民の送出をめぐっては南洋群島引揚者が推進に関与していたことや、ブラジル移民青年隊員に少なからず南洋群島引揚者が含まれていたことが確認できる。さらに、ブラジル移住後は農業を経て都市で商業に従事し、1980年代以降には日本本土へデカセギに行った。主なデカセギ先は神奈川県横浜市鶴見区であり、ここには沖縄県出身の南洋群島引揚者が多数居住していた。本発表はブラジル移民青年隊員の居住地移動を通じて、沖縄出身戦後移民の特性を南洋群島引揚者との関わりに注目し検討することで、第二次世界大戦前から戦後を通じた沖縄—オセアニア—南米—日本本土間の地域間関係の一端をみいだしたい。

講演会②：「琉球・沖縄における孔子廟・積奠の歴史と現在——東シナ海に浮かぶ「境界」という視点から」

石垣 直（沖縄国際大学）

日時：2023年10月27日(金) 17:00-19:00

オンライン（Web 会議システム）にて実施

要旨：

日本列島の南西に位置する島々には、150 年程前まで、「琉球」という王国が数百年にわたって存在していた。この王国は、日本／中国から多くの影響を受けながら、独自の文化を形成した。本発表が主題とする琉球・沖縄の孔子廟およびそこで举行される積奠（孔子祭祀）も、琉球を代表する歴史・文化的な要素の一つである。

琉球における積奠の実施および孔子廟の建設は、近世初期にまで遡る。しかし、個別地域（シマ・ムラ）の習俗やその地域差、そして日本の民俗文化との比較に関心を払うことの多かった沖縄民俗研究においては、孔子廟および積奠という主題は十分に調査・検討されてこなかった。本発表では、関連する資料・先行研究をもとに、琉球における積奠の受容や孔子廟の建設を通じた国家的祭礼化およびその後の展開を整理する。本発表ではさらに、近代に入り「沖縄県」となったこの地域で、孔子廟および積奠がどのように扱われ、沖縄戦の戦禍の後、如何にして再建と復興を果たしたのかを、明らかにする。

本発表が具体的な対象とするのは、中国東南部にルーツをもち、琉球国の外交を支えた久米村の人々による孔子廟（久米至聖廟）建設ならびに積奠である。久米至聖廟の歴史や積奠については、久米村の末裔らが結成した久米崇聖会の刊行物その他で紹介されてきた。また近世琉球における孔子廟や学校の建設については歴史学者らによる研究もある。本発表では、これらの資料や論考ならびに発表者自身の調査成果を踏まえ、琉球・沖縄における孔子廟と積奠を、東シナ海を舞台とした「境界の歴史・文化」の一端として捉え直すことを試みる。孔子廟・積奠を主題としたこうした再考の試みからは、琉球が歴史的に境界であったこと、そして近代以降の沖縄もまた依然として境界であり続けていることが明らかになる。

講演会③：「モノを通した「ダブル・ビジョン」の歴史人類学——慶應大所蔵のニューギニア民族資料を中心に」

山口 徹（慶應義塾大学）

日時：2023 年 11 月 18 日(土)13:00-15:00

会場：慶應義塾大学三田キャンパス南校舎 463 教室

要旨：

美術史家のバーナード・スミス(Bernard Smith)は 1960 年代に、18 世紀後半から 19 世紀前半の絵画資料と航海日誌等の文書資料にもとづき、南太平洋に向けられた西洋の眼差しを丹念に読み解いた。その一連の研究に触発され、同様の史資料を活用しながら、西洋の眼差しと現地の人々の眼差しの交差を「ダブル・ビジョン」として論じたのが、ニコラス・トーマス(Nicholas Thomas)をはじめとするオセアニア史や美術史の専門家たちである。その視座は、独領ニューギニアにおける民族資料の収集の現場を焦点化する歴史家ライナー・ボウシュマン(Rainer Buschmann)に引き継がれている。とはいえ、民族資料そのものの物質文化研究には、いまだ開拓の余地が残っている。19 世紀末から 20 世紀前半に現地の人々が製作し、植民地的状況下の交渉を通して現地行政官や貿易商人らが入手し、そして本国の博物館が収蔵することになった造形物であることを踏まえると、西洋の画家が描いた南太平洋の絵画と同じように、いやむしろそれ以上に、西洋側と現地側の眼差しの交差がそこに宿っているとしても不思議ではない。

奇しくも慶應義塾大学には、主に小嶺磯吉や松江春次に由来するニューギニアの民族資料が 2 千点近く所蔵されている。小嶺は、20 世紀前半に独領ニューギニアで活動していた貿易商である。松江は、戦前・戦中に南洋群島の製糖業を中心に多角的な事業を展開した南洋興発株式会社の社長で、1930 年代には蘭領ニューギニアにも事業を拡大している。本講演では慶應大所蔵のニューギニア民族資料を紹介しながら、その形状や素材にダブル・ビジョンを探る方法について考えてみたい。

講演会④：「移民を受け入れる側」としてのトンガ王国——中国からの移民を事例として」

北原 卓也 (早稲田大学)

日時：2023 年 12 月 10 日(日)16:00-18:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 11 号館 708 教室

要旨：

南太平洋の島嶼国であるトンガ王国は、周辺のポリネシア各国と同様に移民を多く送り出している。教育や職を求めてトンガを出て生活する移民の数は本国の人口を大きく上回り、移民からの送金は国内経済にとって欠かすことのできない財源となっている。こうした社会的な特徴からトンガは移民を送り出す側として注目されることが多い一方、「移民を受け入れる側」としての一面も持っている。本発表では、特に最近増加傾向にある中国からの移民に焦点を当て、トンガがどのような体制で中国系移民を受け入れているか、また中国系移民がどのような生活を送っているかについてその一端を報告する。

トンガにおける移民は、ヨーロッパ系、太平洋島嶼系、アジア系に大別することができる。中でも 1998 年に台湾から中国に外交関係をスイッチして以降、中国からの移民が増加傾向にあり、その数は他の地域からの移民を圧倒している。中国からの移民は職を求めてやってきており、かつてはレストラン経営や雑貨店経営が主流であったが、中国政府によるインフラ整備などの大規模なプロジェクトに伴って移住してきた中国人労働者といった短期間の移民や中国からの観光客をターゲットとした旅行代理店など多様な事業を展開する者もいる。トンガ政府はトンガ人の事業を守るために外国人に対する法的な規制を設けているが、それを回避するために中国系移民の中にはトンガ国籍を取得する者もいる。中国系移民たちの熱心な仕事ぶりはトンガ社会にとって利便性を享受できるものの、脅威にも映っており、それは中国系移民に対する負のイメージにもつながっている。中国系移民たちは未だに差別的な言動に晒されることも少なくないが、婚姻関係や子どもの学校などを通じて、かつてはほとんどみられなかった地域社会との交流をもつ者も現れており、トンガ社会と中国系移民の関係性は変化してきている。

講演会⑤：「観光開発初期グアムにおける日本人コミュニティの形成——先住民・移民関係を
中心に」

長島 怜央（東京成徳大学）

日時：2024 年 1 月 20 日(土) 16:00-18:00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス 1 号館 104 教室

要旨：

グアムでは1960年代末以降に観光開発が本格的に進められ、観光客数は70年には10万人、88年には50万人、94年には100万人を超え、70年代末以降は全体の7割以上を日本からの観光客が占めるようになった。そのグアムの観光産業の発展において一翼を担ったのが、現地の日系企業や日系人・日本人である。60年代末から70年代半ばにかけて、日系のホテル、旅行会社、レンタカー会社、保険会社・代理店、飲食店、免税店などがつぎつぎとグアムに進出した。そして、グアム在留邦人の増加に伴い、70年代初頭には現地に沖縄県人会や日本人会が結成・設立され、日本人コミュニティの基盤ができあがった。

しかしながら、日本とグアムの関わりはこうした観光開発によって始まったものではない。1868年（慶応4年）のスペイン領グアムへの農業移民や20世紀初頭に日本からグアムに渡った事業家をはじめ、19世紀後半以降に多くの日本人がグアムに渡った。そして、20世紀前半にミクロネシアの島々が日本の南洋群島として統治されるなか、第2次世界大戦中に日本はアメリカ領グアムを32か月間占領した。戦後の先住民チャモルはこの日本占領時代のことを「虐殺と強姦の時代」、それを終わらせた米軍による奪還を「解放」と記憶してきた。すなわち、60年代末以降の日本人によるグアム観光開発は、このような戦争の記憶に関連した現地社会の対日感情のなかで進められたのである。

本発表は、現地在住日本人へのインタビュー調査などに基づいて、グアムの観光開発に伴う日本人コミュニティの形成を現地社会および先住民チャモルとの関係を中心に見ていく。とくに、観光産業のなかの日系エスニック・ビジネスの展開、観光とセトラ・コロニアリズムや新植民地主義との関連性、先住民・移民間の戦争の記憶の葛藤などの点に着目して、日本人コミュニティの形成について考察する。